

12月2日 待降節第1主日

イザ 2:1～5 ロマ 13:11～14a マタ 24:37～44

1. マタ

v.40-41 「そのとき、畑に二人の男がいれば、一人は連れて行かれ、もう一人は残される。二人の女が臼をひいていれば、一人は連れて行かれ、もう一人は残される。」

ここで用いられている“連れて行かれ”という言葉は、ヨハ 14:3 でイエスが“わたしのもとに迎える”とっておられるのと同じ言葉です。我が国で昔老人たちの口からしばしば聞かされた“もうすぐお迎えが来る”という表現を、思い浮かべてみましょう。まさにマタイ福音書はそのような意味で語っているのです。その日、一人は神のもとに迎えられ、もう一人は滅びへと残されるということが起こる。そして、残されるであろう人はそのことに全く気づいていない(v.39)。

待降節第1主日の朗読配分は、御子キリストが私たち信じる者を神の国に迎えてくださる救い主であることを、全世界の教会に向かって明らかにします。私たちは「目を覚ましていなさい」(v.42)と呼びかける声を聞いて、今年も新しい典礼暦年を歩み始めます。

すでに半世紀以上にわたって、自由主義世界の国々の多くでは、キリスト教はもはや命がけでそれに帰依する宗教ではなくて、多様な文化や習俗の一つでもあるかのように見られて来ました。そして、普通の信者の福音理解やキリスト理解に、初代教会の使徒たちの宣教からかけ離れた異教的なものが入り込んで来ました。多くのキリスト者が、世俗の人々の好みに教会の教えを適合させようとして、キリスト教独自の神概念を見失ってしまいました。かつて4～5世紀の教会が、ニケア・コンスタンチノーブル信条によって守り抜いたキリスト告白“父と一体(ホモウーシオス)”を思い起こしましょう。イエス・キリストは、信じる者を神のもとに迎えるために来られる救い主です。「だから、目を覚ましていなさい。いつの日、自分の主が帰って来られるのか、あなたがたには分からないからである。」(v.42)

2. ロマ

v.11 「今や、わたしたちが信仰に入ったころよりも、救いは近づいているからです。」

教会は来たり給う主キリストを歓呼して迎える共同体であるということを、待降節第1主日の朗読配分はいつの時代にも明らかにして来ました。その時代の教会が福音の終末的使信に無理解で無関心なときにも、主日のミサの朗読配分がこの使徒の宣教を保持し続けて来たことに、私たちは驚くと共に感謝せずにはいられません。

キリストの救いは、罪と死からの救いです。それは、「憐れみ豊かな神は、わたしたちをこの上なく愛してくださり、その愛によって、罪のために死んでいたわたしたちをキリストと共に生かし、……」(エフェ 2:4-5)と書かれている通りです。世の終わりにキリストが来られる日は、私たちが復活する日であり、そして

最後の敵として死が滅ぼされる日です(1コリ15:26)。ですから、教会は典礼暦の新しい年を迎える度にいつも新しく、「夜は更け、日は近づいた」(v.12)という使徒の言葉を聞いて、信仰の目を覚まします。

3. イザ

このイザヤが見た幻は、“終わりの日”の幻でした。ところが近代人はその中の4節だけを前後関係から切り離して、あたかもキリスト教は地上に平和を打ち立てることを目標にする宗教であるかのような、そんな主張を作り上げたのでした。福音の終末的使信が見失われたところには、実現不能な幻想だけが残ることになりました。

20世紀を代表する哲学者の一人といわれるレヴィナスが、その主著である“全体性と無限”(岩波文庫)の序文で、次のように書いています。「私たちは道徳によって欺かれてはいないだろうか。……聡明さとは、精神が真なるものに対して開かれていることである。そうであるなら、聡明さとは、戦争の可能性が永続することを見て取ることにあるのではないか。」

ユダヤ人である彼が、通俗的キリスト教による旧約聖書への安易で誤った理解の一つを、痛烈に批判していることに私たちは注目すべきです。そしてこの4節を、実現不能な幻想としての平和主義を主張するために、しばしば都合な聖句として利用して来たことを、私たちキリスト者は真剣に反省しなければなりません。

教会が聖書から聞くべきものは、神のことばすなわちキリストの福音であって、それは使徒たちの証言と聖霊の働きによってだけ私たちに届くのです。キリストは私たちを、「剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする」(v.4)神の国に迎えるために、今や来たり給うのです。

来たり給う主キリストを歓呼して迎えるために、新しい典礼暦の一年が今日からまた始まります。

ハレルヤ、アーメン。

12月9日 待降節第2主日

イザ 11:1~10 ロマ 15:4~9 マタ 3:1~12

1. マタ

降誕節と待降節の区別を知らない人が、とても多くなりました。それは代々の教会が受け継いで来た典礼暦への無関心に起因しています。降誕節の主題は、主イエスのかつての降誕の記念とその初期の公現の追憶であります。待降節はこの降誕の祭典のための準備期間であると同時に、また終末におけるキリストの第二の来臨の待望へと心を向ける期間です。

典礼暦の目的は、単にイエスの生涯を歴史的順序に従ってたどるだけだと考えてはなりません。典礼暦全体を貫いている支配的観念は、福音に秘められた終末的使信であります。典礼暦の一年が待降節から始まるのは、そのためなのです。

v.2 「悔い改めよ。天の国は近づいた。」

イザ 40:3に預言されていた“荒れ野で叫ぶ者の声”が、出来事となって現れました。洗礼者ヨハネが、マラキ 3:23で約束されていたとおりに、王下 1:8に描かれているエリヤの姿で現れて、ヨルダン川で人々に洗礼を授けていました。彼の授ける洗礼は、“差し迫った神の怒りを免れさせる悔い改めの洗礼”であって、まさに終末的なものでした。

それは、当時の宗教的特権階級であるファリサイ派やサドカイ派の人々に神の国への優待券を交付するようなものではありませんでした。ヨハネは人々に、罪を告白することを要求しましたが、決して罪のない正しい人間になるなどという条件をつけたものではありません。そんなことが可能なら、“怒りを免れさせる洗礼”は必要ないことになってしまいます。カトリック信者は自動的に神の国に入ることが出来るとか、キリスト教信仰とは罪のない正しい人間になることだと考える人は、福音に秘められた終末的使信を理解していない人です。

私たちが悔い改めて洗礼を受けたということは、“来るべき怒りからわたしたちを救ってくださるイエス”(Iテサ 1:10)に期待する者となったということなのです。このことを、私たちは今年も待降節に思い起こします。

2. ロマ

使徒パウロがここで、「聖書から忍耐と慰めを学ぶ」(v.4)ことに言及したのは、一般的な世俗の道徳を語るためではありませんでした。そうではなくて、教会はユダヤ人と異邦人が約束された神の国を一緒に受け継ぐ(エフェ 3:6)共同体なのだから、「あなたがたも互いに相手を受け入れなさい」と言ったのです。

カトリック教会だけでなくその他の多くのキリスト教諸派においても、世俗のリベラルな文化や道徳観に対する反発があって、あからさまに政教分離を超えて介入するような発言がしばしば見られます。当然そのようなリベラルな文化や道徳観はカトリック信者の中にも存在するのですが、元来保守的な傾向の強い

12月16日 待降節第3主日

イザ 35:1～10 ヤコ 5:7～10 マタ 11:2～11

1. マタ

v.3 「来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか。」

私たちが、間もなくその降誕を祝おうとしているイエス・キリストは、現代のキリスト者にとっても、また復活の希望をもって眠りについた過去のキリスト者にとっても、「今おられ、かつておられ、やがて来られる方」(黙 1:4)であります。この、将来「生きている者と死んだ者を裁くために来られるキリスト」(II テモ 4:1)の第一の来臨を、教会は今年も降誕節で記念しようとしているのです。

獄中のヨハネからの質問に答えて、イエスは御自分がイスラエルの待ち望んでいたメシアであることを宣言して、言われました。「わたしにつまずかない人は幸いである。」(v.6) そして群衆に、ヨハネは聖書で約束された人、メシアの前に道を備える再来のエリヤであると証言されました(v.10、マラ 3:1,23-24)。

ですから、教会が使徒継承によって受け継いで来た福音の伝承は、ヨハネの洗礼の時から始まっているのであり(使 1:21-22, 10:37 参照)、さらに「忍耐して待ち望む」(ロマ 8:25)教会の時代を経て、キリストの再臨と神の国の到来による完成に至るのです。イエス・キリストはヨハネにとって「来るべき方」でありましたが、今なお歴史の教会にとっての「来るべき方」であり続けておられます。

今日キリスト教に関する通俗的な論議の世界だけでなく、神学の世界でも、救いに関する見解の多様性が生み出されています。教会が使徒継承によって受け継いで来たものとは異なる“ほかの福音”が、あたかも現代に適合した解釈でもあるかのように思われているのです(ガラ 1:6-11 参照)。現代の多くの小教区の待降節と降誕節のミサで、キリストの第一の来臨が当時“来るべき方の到来”であったということも、また歴史の教会にとってキリストは今なお“来るべき方”であるということも、もはや語られません。

四旬節の主日のほかに、待降節の4回的主日でも“栄光の賛歌”が歌われないのは、これらの期節が特に悔い改めの時であるからなのです。主は現代のキリスト者である私たちに向かって、今朝再び語っておられます。「わたしにつまずかない人は幸いである」(v.6)と。

2. ヤコ

v.8 「主が来られる時が迫っているからです。」

各家庭でクリスマスツリーを飾って、その周りにクリスマスプレゼントが置かれて、みんなが12月25日の午前0時になるまで開けるのを待つというお楽しみの習慣が、特に西欧では何百年も続いて来ました。そして待降節は、みんながこの日が来るのを首を長くして待つ期節だと考えられるようになりました。我が国の“もういくつ寝るとお正月”という感覚と同じです。

言うまでもなくこれは、キリストの第二の来臨を待つという福音の使信を子供たちに教えるために、先

人が考え出した演出でありました。ところがいつの間にか、本来の福音の使信が忘れられるようになって、プレゼントとクリスマスケーキのメリークリスマス(楽しいクリスマス)が世間の常識になってしまいました。

私たちがミサで、教会が典礼暦によって守ろうとして来た福音の終末的使信を聞くことは、本当に尊い大切な務めです。そこで朗読される聖書の朗読配分に、共同体の会衆が意識的、主体的に耳を傾けることを、主は今朝も求めておられます。

3. イザ

vv.4-5 「見よ、あなたたちの神を。…… 神は来て、あなたたちを救われる。そのとき、見えない人の目が開き、聞こえない人の耳が開く。」

旧約聖書で多くの預言者たちが、人々の神のことばへの無知と無理解を嘆いたように、代々の時代の心ある人々が、その時代の教会に集う会衆の福音への無知と無理解を嘆きました。実際、自分はキリスト者であると思っている多くの人々が、福音に対して“目が見えず、耳が聞こえない”状態であるというのは、いつの時代にも事実です。しかし、“その時には目が開き、耳が開く”というのが神の約束なのです。

イエスの公生涯で起きたのは、まさにそれでした。「目が見もせず、耳が聞きもせず、人の心に思い浮かびもしなかったことを、神は御自分を愛する者たちに準備された」(I コリ2:9)とは、初代教会の体験でありました。イエスはそのことを指摘して、獄中のヨハネにお答えになりました。しかし、それは未だ“教会が忍耐して待ち望む時”が始まった“しるし”であって、完成ではありませんでした。

私たちは、今年もあと僅かで降誕節を迎えます。しかし今はまだ“わたしたちの知識は一部分、預言も一部分”であって、なお終末の完成を待っている、そのような教会として降誕節を祝うのです。やがて“完全なものが来たときには、部分的なものは廃れる”に違いありません(I コリ13:9-10)。その日には新しい神の国に「主に贖われた人は帰って来る」(v.10)のであり、私たちキリスト者の目が開き、耳が開いて、主と「顔と顔を合わせて見ることになる」(I コリ13:12)のです。

過ぎ去った過去の言葉としてではなく、新しい約束の言葉として、今朝のイザヤ書の預言を通して私たちに語っておられる主を、みなで賛美しようではありませんか。

ハレルヤ、アーメン。

12月23日 待降節第4主日

イザ 7:10～14 ロマ 1:1～7 マタ 1:18～24

1. マタ

vv.20-21 「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。その子は自分の民を罪から救うからである。」

新約聖書は、イエスがダビデ家の出身であったと説明しています。それは原始キリスト教が偽証によって作り出した話などではありません。むしろ歴史的に確かなこととして、しかも神の約束の実現としての驚きをもって、物語っています。それは、初めから終わりまで信仰を通して理解すべき神の御業であったことを、福音書は明確に伝えているのです。

ヨセフは母マリアと婚約していましたが、主の天使の言葉によって“普通ではない”歩み方をする事になりました。そのこと(二人の結婚)によって、御子イエスはダビデの子孫として生まれたのです。信仰による従順(ロマ 1:5)によって神の御業を受け入れるヨセフの姿は、キリストの第二の来臨を待っている教会の信仰にとっての手本です。

v.19 「夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。」

イエスはマリアの息子であって、ヨセフの子ではない、つまり私生児であるという非難は、イエスの生前にも死後にもユダヤ人の間で知られていました。ユダヤ人がマリアの姦淫を語ったのに対して、初代教会はそこに神の御業を見ました。マタイ福音書はその冒頭にダビデ家の子孫であるヨセフの系図を書いて、これと戦ったのです。

ともするとただの罪人の集まりにしか過ぎないように見える歴史の教会を、神の国の相続人としてくださるのは「ダビデの子孫で、死者の中から復活された」(II テモ 2:8)キリストです。今年もこの期節に私たちは、信仰による従順によって来るべき神の御業を受け入れることを呼びかけられています。再臨のキリストはすでにすぐ近くに来ておられます。

2. ロマ

vv.2-3 「この福音は、神が既に聖書の中で預言者を通して約束されたもので、御子に関するものです。御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、聖なる霊によれば、死者の中からの復活によって力ある神の子と定められたのです。」

イエス・キリストの福音は、信じる者すべてに救いをもたらす神の力です(1:16)。それは、どんな救いなのでしょうか。「人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。」(3:23)

御自身の血によって、ただ一度永遠の贖いを成し遂げるために(ヘブ9:12)、御子は人となってマリアから誕生されました。そして人々の罪を清められた後、復活して永遠の神の右の座に着かれました(ヘブ1:3, 10:12)。「二度目には、罪を負うためではなく、御自分を待望している人たちに、救いをもたらすために現れてくださるのです。」(ヘブ9:28)

教会は、やがてこの再臨のキリストを歓呼して迎える共同体として、今年も主の降誕を記念します。

3. イザ

アハズ王は自らの不信仰を隠そうとして、神にしるし(証拠)を要求することはしないとしました。そこで預言者イザヤは告げます。主は自ら御自分の救済史の要となるしるしを与えられる。「見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ。」(v.14)

その時に預言者が、どういう出来事を具体的に指して言ったのかを、私たちは知りません。ただそれから800年近くも経った頃に、初代教会はそこにイエス・キリストの誕生を約束する神のこぼれを見出したのでした。間違いなく、それは救済史の要となるしるし(ルカ2:12)でありました。

現代の教会が今年も、キリストの出現とその御国とを思う(IIテモ4:1)ことを、決して忘れることがありませんように。なぜなら「信仰とは、望んでいる事柄(神の約束)を確信し、見えない事実(神の国の到来)を確認すること」(ヘブ11:1)だからです。

ハレルヤ、アーメン。

12月25日 主の降誕/日中のミサ

イザ 52:7~10 ヘブ 1:1~6 ヨハ 1:1~18

1. ヨハ

クリスマスを象徴する光は、言うまでもなく受肉されたイエス・キリストです。人々がこの歴史の中に誕生された御子を信じるようになるために、教会はこの降誕の祭りによって光であるイエス・キリストを証しするのです。

v.14 「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。」

この期節には、全世界で町がクリスマスの電飾で飾られます。我が国でも年々盛んになって、市街地だけではなく住宅街でも電飾をする家が増えています。省エネに逆行すると言われながら、多くの人がこの祭りの楽しさに“癒やし”を感じているようです。

それでは現代人はこの祭りに、受肉された御子の栄光を見ているでしょうか。実際に現代の教会は、光であるイエス・キリストを証しする務めを果たしているでしょうか。

v.11-12 「言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった。しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。」

外見上の世俗化と不信仰の状態がどんなに拡がっているように見えても、それでも確かに、受肉された御子の栄光を見ているキリスト者が存在しているということが、教会の希望なのです。

2. ヘブ

v.2 「……この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました。」

御子の受肉によって、救済史の“終わりの時代”が始まりました。そして、「御子は十字架の死によって人々の罪を清められた後、天の高いところにおられる大いなる方の右の座にお着きになりました。」(v.3) 今や教会はそこから御子が、「生きている者と死んだ者を裁くために来られる」(II テモ 4:1)のを待っています。

ですから、キリスト者は「光の子として歩みなさい」(エフェ 5:8、I テサ 5:5)とされています。クリスマスの象徴である光は、ただひととき“癒やし”を感じて楽しむだけのものではなくて、救済史の完成である神の国を待ち望みつつ「主の光の中を歩もう」(イザ 2:5)という、そういう光なのです。

イエス・キリストの第一の来臨が歴史上の事実であるように、私たちに御国を受け継がせてくださるキリストの力に満ちた来臨(II ペト 1:16)も、現実の歴史の目標です。使徒パウロは洗礼の秘跡について説明して言いました。「わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることに必す信じます。」(ロマ 6:8) これが教会が使徒継承によって今日まで受け継いで来た福音の使信です。

“メリークリスマス(楽しいクリスマス)”や、“クリスマスおめでとう”が、ただの世俗の挨拶に過ぎないと感じる人々のためでしょうか、市販のクリスマスカードの中には本来の福音の使信を伝える意図で、“この期節のご挨拶(Season's Greetings)”と印刷されたものもあります。いつの時代にも確かに、受肉された御子の栄光を見ているキリスト者が存在しているということは、教会の希望です。

3. イザ

v.8 「彼らは目の当たりに見る。主がシオンに帰られるのを。」

この調子の高い第二イザヤの預言は、キュロス王による捕囚の民の解放への期待の中で、紀元前6世紀に語られたものですが、私たちはそれがその時代を超えて、救済史の完成する日を待望する終末的色彩を濃厚に帯びていることに、驚きを禁じ得ません。

主の降誕の祭りは、決して“目出度い昔話”を記念するというようなものではなくて、受肉して私たちのために永遠の贖いを成し遂げてくださったキリストの再臨の日に向かって、「主の光の中を歩もう」(イザ2:5)と呼びかける声を聞く祭りなのです。

v.7 「いかに美しいことか、山々を行き巡り、良い知らせを伝える者の足は。」

一人でも多くの方が、福音の使信を聞くことの出来る降誕節でありますように。

ハレルヤ、アーメン。

12月30日 聖家族

シラ 3:2-6,12-14 コロ 3:12-21 マタ 2:13-15,19-23

1. マタ

新約聖書全体について全般的に言えることを、特にマタイ福音書については強調して言うことが出来ます。それは、この文書が一人の著者による私的な文学作品としてではなくて、当時のある特定の地方の教会における信徒教育と司牧の実態の中から生まれたということです。ですから私たちもこれを読むとき、その第一の対象がキリストの体である共同体なのだとということを、理解していることが大切です。

マタイ福音書の誕生物語の際立った特色は、母マリアではなくて夫ヨセフが主人公だということです。彼は夢の中で神からの指示を受けます。マタイの用語法では“神が語られた”と言う代わりに“主の天使が”という表現を使います。ヨセフはそれに服従し、その結果「主が預言者を通して言われていたことが実現」するのです。

「わたしは、エジプトからわたしの子を呼び出した」(v.15)は、ホセ 11:1 からの引用で、その背景には父祖たちが飢饉でエジプトに逃避したという伝説があり、ベツレヘムからエジプトへ、そしてナザレへという聖家族の逃避行のすべてが、旧約聖書によって裏付けられています。「イスラエルの地に行きなさい。この子の命をねらっていた者どもは、死んでしまった」(v.20)は、明らかにモーセによる出エジプトの出来事を連想させます。神はモーセに「わが民イスラエルの人々をエジプトから連れ出すのだ」と命じ(出 3:10 外)、「あなたの命をねらっていた者は皆、死んでしまった」と言われました(出 4:19)。

教会とは、イエスキリストを信じて神のことばに聞き従う共同体であり、神のことばは教会の歩みと共に実現して行くのだと、マタイ福音書は教えました。神の国を受け継ぐのは、切り離された個人ではなくて、教会という共同体なのです(6:33, 21:43, 25:34 参照)。ですから、この福音書から聖家族の私的な面での体験談を聞こうとするなら、それは的外れたことであると知りましょう。

2. コロ

v.15 「キリストの平和があなた方の心を支配するようにしなさい。この平和に与らせるために、あなた方は招かれて一つの体とされたのです。」

私たちが体験しているカトリックのミサで、聖書の朗読とそれに基づく説教が、“神のことばの食卓の富を豊かに与える”(典礼憲章 51)という本来の役割を、実際に十分に果たしているだろうかという問題意識を持つことが、残念ながら薄いように感じられます。信者が個人で聖書を読むときにも、たいてい私的な敬虔を養うというような目的意識が働いているのではないのでしょうか。

しかし聖書は、教会共同体とそのミサから切り離しては、その本来の使信を正しく読むことが出来ない書物なのです。「キリストの平和」とは、キリストの贖いによって今や教会が得ている“神との間の平和”(コ

マ5:1)のことであり、この平和は“神の国の栄光に与る希望”(ロマ5:2)と固く結びついています。この“天に蓄えられている希望”(1:5)、“秘められた計画”(1:26、エフェ3:3-6参照)の共有によって「一つの体とされた」(v.15)のが教会共同体です。ですから聖書は、共にミサをささげることによって“神をほめたたえなさい”(v.16)、“感謝しなさい”(v.17)と教えているのです。

w.18 以下の夫婦や親子などへの勧めの言葉も、彼らが教会共同体に属しているということ、「あなたは、御国を受け継ぐという報いを主から受ける」(3:24)仲間なのだ、ということが前提になっています。決して単なる個人の私的な敬虔や道徳を教えているではありません。

3. シラ

イスラエルの知恵文学も、古代近東の国々との国際的な交流の中で発達したもので、旧約聖書の律法や預言の書と異なり、民族的・救済史的信仰であるよりも、個人的・社会的な人間の知恵がその中心になっています。私たちはそのような文書が含まれた“あるがままの旧約聖書”に、自由に取り組むことが出来ることを喜ぶべきかも知れません。

しかし私たちが忘れてはならないことは、初代教会がこれをユダヤ教から受け継いで、新約聖書と共に正典としたとき、これを“教会の信仰の書”として受け入れたということです。“教会の信仰”とは特別な関係を持たない単なる文学書や歴史書として、あるいは世俗の知恵の書として、正典の中に採用したものではありませんでした。

ですから、キリストの福音が親から子へ、子から孫へと伝承されて行くという、そういう父子関係、母子関係を念頭に置いてこのテキストを読むことが、大切です。そうすれば、新約聖書の中のイエスの次のような言葉とも矛盾することなく、私たちは豊かな信仰の知恵を得ることが出来ます。

「わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりも息子や娘を愛する者も、わたしにふさわしくない。」(マタ10:37)

イエスはダビデの子孫であるヨセフの子としてお生まれになりました。神の言葉へのヨセフの従順を思いつつ、このシラ書の“父”をそのような父親として読むことは、私たちキリスト者の特権なのです。

ハレルヤ、アーメン。